

ボストン留学記

Department of Radiation Oncology
Massachusetts General Hospital
Harvard Medical School

茂田 浩平
(ハーバード大学マサチューセッツ総合病院)

2016年4月から米国ボストンのマサチューセッツ総合病院（MGH）放射線腫瘍学講座の Edwin L. Steele Laboratories に研究留学させていただいております。当研究室は Rakesh Jain 教授が統括しており、その下で Jain 教授を含む 8 人の Principal Investigator (PI) がそれぞれの研究室を持っている大きな研究室です。それぞれの PI のもとに、ポスドク研究員 (Research Fellow)、博士課程の大学院生、テクニシャンが所属しており、各自のバックグラウンドや専門性を活かして各々のプロジェクトを遂行しています。私は、その中の研究室の一つである Dan G. Duda 博士の研究室 (Duda ラボ) に直接所属し、ポスドク研究員として消化器癌の研究に従事しております。

Duda ラボでは、トランスレーショナルリサーチをメインとする研究室です。当研究室で所有する独自の mouse colony で breeding をしているマウスを用い、様々な新規治療の開発、効果の検証を行っています。扱う癌種は多岐にわたり、肝細胞癌、胆管癌、膵癌、胃癌などの消化器癌に加え、前立腺癌、乳癌も対象としています。マウスにおいて有効性の認められた新規治療については、共同研究を行っている臨床医とのディスカッションのもとに臨床試験の計画を行い、Bench to Bedside を実践しております。私は、当研究室で腫瘍微小環境の改善による腫瘍免疫応答の改善を大きなテーマとし、主に肝細胞癌の研究プロジェクトを任されております。

当研究室は他の PI のラボも加えると総勢80名程度となる比較的大きな研究室となります。そのため、Fellow や PhD Student として多くの国から人が集まってきており、さらには短期研究留学生も多く参加する活気あふれる研究室です。このように米国のみならず、数多くの文化や人に触れて交流する機会があることは自分にとってかけがえのない財産になると実感しております。人と人の交流のためにはコミュニケーション能力が最も重要となります。英語を話す能力も大事ですが、うまく話せなかったとしてもできる限り話しかけることが重要であり、それが新たな出会いや経験を生むのだと感じております。今後留学を検討されている先生にはその点でぜひ頑張ってくださいと思います。

その一方で、アメリカの研究室に在籍することで研究資金の獲得の困難さや業績を積み重

ねることの重要性を痛感しています。所属する Fellow には常に Fellowship の獲得を強く求められますし、PI は次の研究資金獲得のために日々奔走しております。私自身のこれまでの努力不足を感じる事が多く、自分が研究者、Scientist として成長するにあたり、足りない部分をクリアに実感できたことは今後の糧になると感じています。楽しくもあり、苦しくもある有意義な留学生活を送らせていただいておりますが、このような貴重な機会を少しでも生かすことができるように、残りの留学生活を大切に過ごしていきたいと思っております。

最後に、留学の機会を与えてくださった慶應義塾大学医学部一般・消化器外科の北川雄光教授をはじめ、教室員の先生方、また貴重な留学経験をご支援いただいた上原記念生命科学財団の皆様に厚く御礼申し上げます。 (30. 5. 5受領)